

職種	名前	テーマ
作家	虫明 亜呂無	そそがれる目

No.49



テレビで十五分、語る。男と女の言葉の違い、意識の違い、従って文化の違いがテーマである。その足で、地方の講演に行く。取材にまわる。東京へ帰ってくる。女性編集者や、フリーで活躍している女性と、つぎの仕事の打ち合わせをする。女性達もいる。「おなじネクタイですね」と云われる。ケースが違っても、云われる言葉は同じである。これまでにそんなことが、幾度もあった。「目が、ネクタイにいつているな」と、思わざるをえない。別に、どうということはないのだけれど、目がネクタイにそそがれていることは、確かである。微妙な感性のそよぎが、僕の鉢内を走りぬける。

ジョイス・キャロル・オーツは、僕の大好きなアメリカの女流作家である。僕はこの人の作品から、多くのものを学んだ。

女の感受性、想像力、愛の想い、その他である。彼女の作品に、つぎのような箇所がある。

娘が若い時に、父から男の原型を感じとる。父はいつも地味で、落ちついたネクタイをしていた。それが私の心に、みずみずしいイメージを誘った。私はそれで華やかで、新鮮な女性に成長していった。私はファンシーな女に、生まれ変わっていった。というのである。ネクタイについて、これほどみごとな描写はない。僕はネクタイと云うと、いつもこの文章を思い出す。

S. 56.3

職種	名前	テーマ
衆議院議員	越智 通雄	「身なりは心を正す」

No.50



私の家にはネクタイの為の小さなタンスがある。私自身の考案にかかる独特な作品である。高さ一メートル七十センチ、幅七十センチ、奥行が二十センチと大変浅いものであるが、上下二段にパイプを通しネクタイが六、七十本掛かっている。もちろんタンスの安定性を保つ為に下の十センチ程は、小さな引出しが横に三つ付いており、それぞれポケットチーフ、バンド、礼装用品の入れ場所となっている。おまけにこのタンスの扉は、透明のガラスで両開きで作ってあるから、部屋にとってもちょっとした室内装飾家具になっている。

私はもともと洋服ダンスの中にネクタイを掛けるのが嫌いである。洋服を着ながらネクタイをどれにしようかと選ぶのがもつとも効率的だと考えたのである。同時にそばにいる家内などから、私の着ているその日のスーツを見ながら、「上の段のんから三つ目ぐらいがいいんじゃないか」というアドバイスをしてもらえるひとつの楽しみもある。

昨年の夏衆議院においては、本会議場に入るときに議員はいかなる服装をしているべきかというささやかな論争が行われた。

規則の上ではネクタイ着用である。これにボウタイが入るかどうか、あるいはネクタイをしていればいわゆる省エネルギーの半袖でもかまわないかというのが論点であった。私は大事な国政を審議する場であるから、やはりキチッとした背広をつけるべきであるという意見で、たまたま私が国会対策副委員長をしている関係もあり自民党の若手代議士諸君にはそのようにおすすしめし、昨夏はこれを守ることが出来たのをよかったと思っている。

身なりは人を正す。ネクタイはそのシンボルなのである。

s.58.1.

TIE エッセイ

職種	名前	テーマ
元東京学芸大学学 長	木下 一雄	画伯の筆

No.51



大槻文彦の大言海には、ネクタイを襟飾りと訳してある。昭和初年の富山房の百科事典では、ネクタイを説くのに、その種類を主として掲げている。フォア・イン・ハンド(FourinHand)結び下げた部分が、手で四つ握られる程の長さのもの、ダービータイ(DerbyTie)絹編の結び下げ、スタッドタイ(StudTie)結び切りにした飾付のもの、ワイド・エンド・タイ(WideEndTie)先きが幅広のもの、オックスフォードタイ(oxfordTie)細い紐型のもの、ボータイ(BOWTie)蝶ネクタイ、燕尾服用、タキシード用、夜間用のもの、アスコットタイ(Ascottie)蟬型ネクタイ、ボヘミアンタイ(BOhemianTie)スカーフ用に作り、蝶結び、主として芸術家用、ストックタイ(StOckTie)白地カラー付、主として乗馬用等々、ネクタイにこれほどの形式的な種類があるものかとびっくりした。

二十数年前、わたくしの古稀の祝いの時、多くの方々のご好意によりわたくしの肖像画が出来た。伊原宇三郎画伯の筆である。その時、伊原画伯には、初めわざわざわたくしの家をお訪ね下された。そして肖像画がやがて掲げられる室をご覧になられ、光線の具合を研究された。それからわたくしの着る服、そして特にネクタイを吟味された。以後、毎週一回、三箇月以上、わたくしは画伯のアトリエに参上した。その折、およそ画家がひとつの作品を完成するまで、どのように心魂を尽くされるものであるかということ、いとも深く感じた。

その秋、古稀のお祝いの日、肖像画が式場正面に飾られた。満場の方々、激賞してよろこんで下さった。それから今日まで、わたくしの家を訪れた方で、この肖像画の前に立たれた人は、例外なく口を極めて誉められる。

さてわたくしも、時折、この自分の肖像の前に立つ。本当に身に余る肖像であることを感じる。そしてまた不思議にも、おのずから肖像の真ん中に位置するネクタイを注視するようになるのである。もしこの肖像画にネクタイが描かれてなかったら画がどんなになろうとさえ考える、そこには空虚感もありえよう。

ネクタイは単なる襟飾りではない。種類が多くあるのも、そこに理由がある。

s.58.1.

職種	名前	テーマ
音楽評論家	属 啓成	センスは流行を超越する

No.52



人はその身なりである程度まで人柄がわかる。職業、地位、趣味、教養などが服装に反映されるからだ。経済人と芸術家ではなんとなく違いがあり、同じ物を着ていても着方が同じではない。

同じ芸術家でも画家と音楽家は一目瞭然とすることが多い。もし人が裸で生活するとしたら、その区別はむしろかしくなるだろう。

う。

私の学友で - - -もう亡くなった人だが、徴兵された一兵卒で毎日の兵務がキツかった時代、何となく口ひげをたくわえてみた。ところが浴場で他の兵卒から拳手礼を受け、自分の兵卒服を丸め抱えて、早々に浴場を出たといってみんなを笑わせた。

ひげは服装ではないが、若い学生がひげを生やす時代ではなかったので、ユニークな話である。

今の情報化時代では、服装の流行の移り変りが、実に目まぐるしい。ズボンが太くなったり細くなったり、短くなったかと思うと今のように長くもなる。襟の幅も毎年変わるので、それに合せてネクタイの幅まで変わってくる。ズボンと襟の寸法直しの商売が看板を出すようになり、洗濯屋がネクタイのクリーニングと幅詰め宣伝ビラを置いていった。しかし幅をつめても、色や柄の好みが変わってくるので、幅詰めだけで済むものでもない。

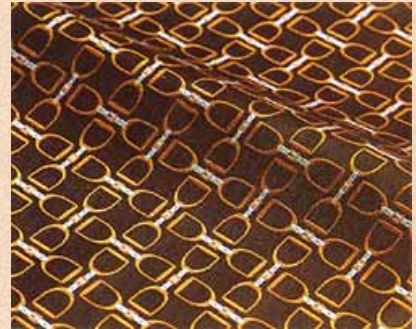
ネクタイの歴史もその源をたぐって行けば、どうせ古代までさかのぼるだろうが、あごの下にぶら下がるこの小さな布切れは、人に会ったその瞬間、一緒に目につく存在である。言わば身なりの顔であり、戸口の表札のようなものでもある。原色でけばけばしさを誇ることもできるし、目立たない色調で控え目な奥床しさを秘めることもできる。

ネクタイの趣味に強い関心が集ったのは、十年この方のことではあるまいか。その移り変りは、春と秋の衣替えの頃の電車や集会などで特によく目につくが、もっとも顕著な現れはテレビである。ニュースキャスター、アナウンサー、テレビタレントはかなり神経を使っているようだし、選挙演説の国会議員たちにも、目立って派手なネクタイが多くなった。今までの平均趣味は一概に渋好みで、調和のみに偏した同色系が多かったが、最近のテレビに映るネクタイは、コントラストを重んじた対色系が多い。明るい服にはアクセントをつけて暗い色、暗色の服にはその逆である。日本の流行には常に一律化する傾向が強いが、それを超越して応変ができるのは、ひとえにセンスの問題となるう。

s.58.1.

職種	名前	テーマ
美術評論家	白崎 秀雄	無帽はノータイに通じるか？

No.53



どういものでしょうかナ、戦後の日本の男がおしなべて帽子をかぶらないのは。

平常でも背広の三つ揃い、婚礼などにはドスキンのダブルの服、さてはタキシード、おエラがたでは燕尾服などで気張って叙勲の式などにお出かけになるのに、ソフトもシルクハットもなしで、すまし顔。アメリカ人の真似から日本人が残らずノーハットとなり、ベスト・ドレスサーなどといわれるいっばしの伊達男までが無帽なのは言ってみればミニ・スカートがはやりだすと四十女、五十女までが肉のこけたひざを出したがるのと同じで、気の毒という以外ありませ「いやぁ、先日は大変お世話になりました」とおじぎするときうやうやしく帽子をとるから形になる。無帽ではこりまみれの頭を下げるだけでは形にならない - カタなしです。屋根のない家のようなものです。

え、そういうお前は？ と聞かれるのですか.....。ソフト、ハンチング、パナマ、ピッケ帽、ヘルメットなど、折々にかぶって、多少時代遅れじみた滑稽感をもって人々から見られるのを、愉しんでいます。

.....。
ネクタイもいずれこうなるんだろうか？。

s.55.4.

職種	名前	テーマ
評論家	柳田 邦男	ネクタイは秋の便り

No.54



ことしの夏も、長野県野尻湖の国際村で一カ月を過ごした。

かつて外人村といわれたこの一角には、毎年七月になると、アメリカ人、カナダ人、ノルウェー人など、さまざまな国の宣教師や大学教授や外交官などがやって来て、休暇を過ごす。

人々はもう身分などからすっかり解放されて、スポーツシャツに半ズボンといった姿で、往来する。朝夕は、テニスやショートコースでの家族的ゴルフに興じ、日中は湖畔の水泳場で甲羅を干す。人々は、身にまとうものをできるだけ脱ぎ捨てて、自然に帰るのである。

だが、八月もなかばを迎える頃になると、朝方の気温はめっきり低くなり、秋風がさわさわと吹き始める。山の気候は季節の変化に忠実である。夕暮れの岸边には人影もなく、モノクロ映画のシーンのような哀愁さえただよい出す。そうすると、にわかに都会の生活が恋しくなる。

そう、この小冊子が読者の手許に届く頃、私は東京に帰っている。ネクタイをきゅっと締め、スーツで身仕度するすがすがしさ。ワイシャツは、落ちついた地紋の入った白にしよう。そしてネクタイを楽しむのだ。紺もよし、茶もよし、グレーもよし。

ネクタイは爽やかな秋の便りである。

S. 58.4

職種	名前	テーマ
天王寺文化 人会幹事長	尼崎 利太郎	おおさか人とネクタイ

No.55



ほんとうの大阪人、先祖代々続いている家柄の大阪人は、今日の大阪にはほとんどおられません、それでもごくまれに「私の先代は、先先代は大阪のどこそこでこれこれのあきないをしていましたんや」と、明治・大正の頃の大阪を大阪べんではなす方に出あいます。いずれのお方も人なつこいおおらかで、お人よしの好人物です。

おはなしをしているうちに、その方々の身だしなみ、しぐさを見ているともうしあわせたように決して派手ではなく、それでいてじみでもなく、大阪の風土が自然と身についたしっくりとした装いをいかにも気がるに身につけておられるのには、つくづく感心もし、これが大阪人だなアとおもいます。

他人さんには失礼にならない程度の服装、きりりとした服装とか、これみよがしの派手なものは決して身につけておられませんし、それでいてだらしない服装でもなく、おだやかでむしろ心あたたまる服装を身につけておられます。

そこで、ネクタイなのですが、これも先程から書いたように洋服、シャツ、ネクタイ、靴下、靴にいたるまで大阪の人たちは目だつでもなく、「なんとなくいい身だしなみだなア」と心から身についたものを感じさせられ、ます。「私はネクタイはバーゲンでしか買いまへんで。千円以上のネクタイしめたことおまへんで」と云われる、本人の身だしなみ、洋服もシャツもそれほど上等のものでもなく、首を飾っているネクタイも、その人の心のぬくもりを通える身についた色あいで、人と人柄の良さをしみじみと味わせて下さいます。

大阪人はやぼったいとか、けちとか、地方からきた人々がよく云いますけれど、ほんとうの大阪人は心から衆を見ぬいた、また、衆のなかにいる自分自身をわきまえて、いつも心ある身だしなみを身につけておられます。この姿こそが大阪人だとおもいます。

おおさかで生まれ、大阪で育ち、大阪をえがいて今日にいたる。

s.58.4.

TIE エッセイ

職種	名前	テーマ
組織工学研究所署 長	糸川 英夫	私のネクタイ観

No.56



女性が男性に何か贈りものをしようと思ったらネクタイだけはおやめになる方がよい、というのが苦からの私の持論である。

その理由は、ネクタイを締めた経験のない人に、ネクタイの「締め心地」が判らないように、「締め心地」を知らない男性が、女性に「帯」を贈るようなものであるから。

それにもう一つの理由は、「帯」の場合、その下にあるべき「きもの」の色、柄をぬきでは考えられぬであろうから。

十二月になってクリスマスが近づくと、ネクタイ売場の前でネクタイ選びをしている女性が多い。きいていると、「すてきな柄ね」「いい色ね」といった調子である。つまり、ネクタイという独立した単品の美術的、芸術的価値を、活花の家元が活けたいけばなの如く、ロダンのつくった彫刻の如く論じているのであるが、ネクタイだけが町を歩くわけではないのである。

だから、うっかりこんなネクタイを贈られると、それに合った上着を新調し、それに合わせてYシャツを買い、スラックスを買い、靴下と靴をかうハメにおちいる。

締め心地とは、明しめるときの手ざわり、一度でキュッと思った形にまとまる、あのまとまり具合であり、ネクタイを取るときにゴワゴワしないでシュッと抜けるかどうかなのである。

だから助成がネクタイを選ぶのは無理だという思想を持つのである。

s.53.3.

職種	名前	テーマ
衆議院議員	愛野 興一郎	心を素直に反映させて

No.57



私の学生時代は、戦中、戦後の荒廃時代であり、また、質実剛健の気風を持つ中央大学のせいもあり、お洒落に気をとめる時代ではなかった。しかし、洒落っ気は充分で、結婚後、ネクタイは自分でよく買い歩いたが、その都度、家内からセンスが悪い、年寄りくさいと、よく言われたものである。ところが、衆議院議員になって驚いたことは、七十歳以上の先輩議員でさえ、服装がすべて若々しくセンスの良いファッションで包まれている人が多いことである。

これでは、私のお洒落が年寄りじみて見え、しかも、この頃は公式の場や日常のおつき合いが多くなり、服装のルールについても迷うことが多かった。そのため、上品な色調を選ぶ努力をし、お洒落にも喜びや悲しみがあるように、心を素直にファッションに反映させたいものだと考えるようになった。

それからというもの、お洒落の楽しさがわかってきたような気がする。

武骨そうな園田外務大臣が、昨年度の男性ベストドレッサーのナンバーワンに選ばれたことも刺激の一つであり、私も、トータルファッションの一部と考えられがちな男のポイント、「ネクタイ」のお洒落を今後共心掛けたいものである。

s.54.5.

職種	名前	テーマ
作家	藤本 義一	ネクタイ交換

No.58



この数年間に五回、だから一年一回の割で、私は、自分の締めていたネクタイを取られそうになった。クラブで三回、新幹線のグリーン車の車内で一回、そして大阪の街角で一回だった。

取られそうになったという犯罪めくが、正確にいうなら、交換を申し出られたのだ。「藤本さん、ぼくのネクタイと交換して下さい」と一番はじめにいわれた時は、情きと腹立ちと一緒にやってきたものだ。しかし、相手は冗談をいってるわけではない。真剣な面持なのだ。五回目の時に、訊ねてみた。

「どうしてですか」

「いや、昨夜、そのネクタイでテレビに出ていたでしょう。いい柄だなあと思って……」

「あなた、ネクタイばかり見ていたのですか」

「いや、そういうわけではありませんが、ネクタイは、テレビの場合は印象的ですからね」

そういわれれば、交換を申し出られるのは、いつも地方の局での中継を終えて大阪に頻る途中であることがわかった。

私は、それ以来ネクタイを意識する度合いが深くなった。が、深くなればなるほどネクタイの選択は難しくなっていくのは事実だ。ネクタイは散文だと思っていたが、ネクタイは哲学なのだとは今は考え込んでしまう。

s.53.4.